

昭和22年南九州の旱魃と陸稻の被害に就て

紙 屋 貢

鹿児島農事改良試験所鹿屋試験地

昭和22年の南九州の旱魃は従来と稍異つた様相を呈し昭和9年の旱魃に比して被害の地域は狭まかつたが畑地帯を主としたので陸稻を主として甘藷落花生等に大被害を及ぼした。

1. 従来は旱魃では6月の空梅雨を以て始まるのであるが昭和22年度は6月は平年以上の降雨があり水稻の植付不能はなかつた。
2. 旱魃状態が著しく長期に亘り7月から10月迄続いた。大抵の旱魃年に於ては8月下旬から9月上旬にかけて相當の降雨あり旱害が恢復しその早晩とそれまでにうけた障害の程度に依つて被害で決定するのであるが本年旱魃に於てはこれがなかつた。
3. 山間地帯には平年以上の降雨があり沿海地帯の水田以外にはあまり被害は認められずむしろ高温多照のため豊作をもたらした。

以上の如く本年旱魃は特異の様相を示したのであるがこれを過去に求めると明治37年の旱魃によく似てゐる。昨年の氣象の概況は次の通りである。

1. 6月迄は略平年並なるも7月～9月までは高温で10月から急に低下し旱魃年によくみる早冷の傾向を示した。
2. 6月の降水量は各地共平年の略15%程度であるが7, 8, 9月の雨量は旱魃地帯に於ては7～50%程度しかなかつた。
3. 日照時間は旱魃期間を通じて著しく多かつた。旱害をうけた地域は次の通りで昭和9年の場合と稍趣を異にして次の通りである。

1. 被害最も甚しき地帯。7, 8, 9月の雨量200耗以下にして鹿屋を中心とする畑地帯、指宿、山川、顯姓等の掛宿郡。
2. 被害甚しき地帯。7, 8, 9月の雨量300耗以下の地帯にして薩摩半島の南部、大隅半島の畑地帯、及日置郡の西海岸一帯、これを昭和9年の場合に比較すると最も甚しかつた出水、薩摩の西海岸及び川邊郡の西南岸一帯が昨年は比較的に被害

が輕微であつた。

これら旱魃が陸稻に及ぼす被害の様相は次の通りである。

1. 萎凋。最も早く表はれる現象で品種間の差異明瞭で概して糯が弱い。最も甚しき品種は浦三、献上錦、尾張糯八號、嘉平、熊本一號、霧島で稍弱き品種は農林十一號、陸稻神力一號、東明。凱旋糯にして農林糯六號、坊主ヤカン、戦捷、葉冠は比較的強い。
2. 心葉の枯死。萎凋と略同時にみられ浦三及び類似の品種のみにみられた。
3. 出穂遅延。旱害甚しき場合出穂不能になる。旱害の時期と陸稻の生育相とに依りて異なり本年は晩生程甚しかつた。同出穂期のもので品種間の差異はあるものの如く育成系統及葉冠坊主ヤカンは比較的強く嘉平最も弱い。
4. 不稔。旱害の時期と出穂の早晩に依つて左右せらるるも同一出穂期のもので品種間の差異あり萎凋とは關係なく浦三、凱旋等却つて少く戦捷が多い傾向を示した。
5. 稻熱病と耐旱性。旱魃後の降雨に依り稻熱病の發生をみるのであるが昨年は萎凋のまま枯死したので品種間の差異は認められなかつた。
6. 旱害後の恢復。ポット試験の結果に依ると萎凋の程度及その早晩とは關係なく農林十一號、坊主ヤカン、嘉平等恢復力が旺盛であつた。

以上の如く陸稻の旱害は萎凋→出穂遅延→不稔→枯死と經過するのであるが降雨の時期の早晩に依つて被害の程度はきまり昨年は殆ど枯死し收穫皆無になつたのであるが、これを他の作物の被害と比較すれば次の様である。即ち甘藷は平年の63%で昭和9年の84%に比すれば相當の減收であり旱魃の長期に亘りたるためと思はれる。粟は比較する成績がないが昭和9年は98%で殆ど被害なく本年も作況は略良好であつた。